

東郷の

願い

海上保安庁救難課 調査係長

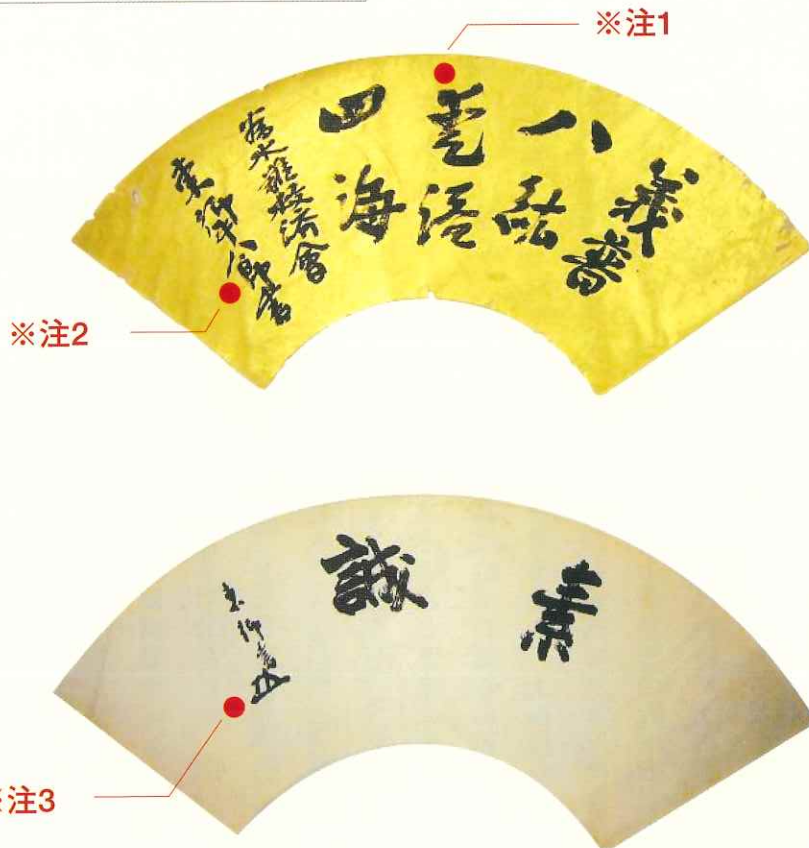
鈴木 朋幸

その部屋に、二枚の扇（扇面）がある。
一枚は黄金色で、もう一枚は白金色の扇である。どちらも鈍い光を放ち、書体は力強く、墨は色濃く、それらはすでに随分と扇に馴染んでおり、歳月の経過を感じさせるとともに、揮毫した人の度量と思想さえも感じ取れる。

平成十九年十一月のある日、私はその部屋の扇の前に立ち見つめている。

その部屋とは、社団法人日本水難救済会の理事長室であり、扇に揮毫されたその書は東郷平八郎によるものである。

図説・・・東郷元帥の扇面



※注1：解読に紛糾した草書 扇面の愛は中国明代の書家「王鐸」の、續は中国唐代の書家「林藻」の書体にそれぞれ酷似していることから、最終的に「愛」、「續」と解釈した。

※注2：特徴のある「郎」、東郷による書をいくつか調べたが郎の「おおざと」をやや下げて書くくせがあるようだ。

※注3：東郷が書に入れる花押、実は海軍の英語表記「NAVY」の「N」をかたどったものである。

東郷平八郎とは、ご承知のとおり、日露戦争において、両国の雌雄を決した日本海海戦における連合艦隊司令長官であり、露国バルチック艦隊を壊滅に追い込み、結果的に日露戦争の勝利を呼び込んだ日本帝国海軍の提督である。

当時、人々からそれなりに脚光を集めていたに違いないその扇は、今はあまり顧みられることもなくその部屋に飾られている。部屋の主である現理事長の坂本氏に扇のことを聞いてみた。「私がこの部屋に来たときには既に扇は飾られており、どのような経緯で、いつごろからあるのか聞いたことがない。」とのことであった。

これから、この扇に隠された歴史をひも解きながら、東郷の心のうちをさぐることにしよう。扇の書をそのまま引用すると、黄金色の扇には、

「義普 八紘 愛續 四海」
為水難救済会

東郷平八郎書

と結ばれている。また、白金色の扇には、

「素誠」
と右から左へ横書きで綴られ、最後に

「東郷書 (花押)」

と縦書きで結ばれている。全体には読みやすい楷書となっているが、「愛續」のみ草書体で綴られており判読が難しく、当初その解読については諸説飛び出し紛糾した。浅学非才の小職の手には負えず、知り合いを通して大学教授や市井の古文書解読家にご教示を仰いだ。特に、ある女性の書家には、お手を煩わせた。彼女によれば中国の唐代、明代における著名な書家の字体に酷似していることから「愛續」と読め、また、東郷元帥の書は、極めて高いレベルに達しているとの感想であった。

書の読下しと意味についてはいろいろな解釈があるかと思うが、ひとまず次ぎのとおり解釈する。

義(ぎ)は八紘(はっこう)に普(あまね)くして、愛(あい)は四海(しかい)

に續(つづ)く

愛は四海に続く。なんと素晴らしい表現か。明治のあの時代、しかも高名な提督が、様々な人が見るであろうことを前提とした書の中で、愛という言葉を使つたことに驚きを感じるとともに、あらためて人間東郷の大きさと意外な面を垣間見る気がした。

書を見ていただければ分かる通り「義と愛」、「八紘と四海」、「普くと続く」が全て対となっていることから、東郷は、日本の義と西洋の愛とを同じ意味として捉えたのではないか。そして、それが水難救済会の、人命救助を支える救難所員の精神の核であると。義は道理であり、利害を捨てて人道につくすこと、また、愛は自己犠牲に基づく人間等への限りない慈しみである。もし、東郷がそう考えたのであれば、それはまさに水難救済会活動の根源である。実に正確に、水難救済会の本質をついているではないか。そして、最後を「愛は、四海に続く」とし

東郷の願

たのは、彼が、義を愛とみて、その愛は四方の海に続くとした。それは、同会の崇高な意義と活動の広がりの意味し、また、そうあって欲しいと希望を込めたのではないのか。私には東郷の強い気持ちを感じられてしかたがない。そうであれば、全体の意味は、水難救済会の活動が国内隅々に（八紘）普く広がり、さらに愛は世界（四海）に広がる（続く）と解

積できる。
そして、この愛とは人道主義であり博愛とも共通する考え方で、おそらく東郷がこのように考えたには明治四年、当時二十三歳であった彼が、足掛け八年にわたり英国に留学した経験と関係があるのではないか。当時の英国は、ヴィクトリア女王が君臨し、いわゆるパックスブリタニカの時代であり、英国が世界の覇権を握っていた。議会政治や民主主義も発展し、世界で最も進んだ国であって軍事学はもとより政治的にも社会的にも学ぶことは多かつたはずであり、青年東郷は

英国の近代文明に、また、その文化にと、あらゆる事象に感化されたに違いない。なお、英国留学は大久保利通に依頼し断られたが、彼が私淑していた西郷隆盛は、これを承諾した経緯がある。あるいは、その西郷の言葉「敬天愛人」にも影響を受けているかもしれない。

このような背景を考えると扇の書は領けるし、おざなりで揮毫したのではなく、水難救済会の活動に対し深い理解と心からの共感を示したものであることがわかる。
だが、何が東郷の心の琴線にふれたのか。その何かに感動したからこそ深い理解をしめし、あのような書を揮毫したはずである。

※

まずは、東郷平八郎の名を一気に高めた日露戦争と水難救済会との関係を見る必要がある。明治三十七年二月六日、我国

が露国に対して国交断絶を通告していることから、この日が日露戦争開戦ということになるのか。以後、水難救済会も日露戦争にかかわっていくことになる。その三日後、二月九日付で、救難所、救難支所、見張り所等に対し、戦時心得が訓令され、その内容は水難救済会百年史によれば、「救難所は戦時に於いても、平時に於けるがごとく施行すべし。略」

戦闘力を失いたる軍艦の遭難若しくは艦員にして生命を喪失せんとする場合は直ちにこれを救助し」となっており、敵味方の区別なく人道に則した遭難者の救護活動を指している。戦時中とは言え人道的な考えが堅持されており、当時の日本の高い見識が感じられる。

翌年、明治三十八年五月二十七日及び二十八日の二日にわたり、激闘が繰り広げられた日本海海戦で露国バルチック艦隊は壊滅状態となったが、この海戦でも水難救済会が関わっている。日本海軍に沈められた露国軍艦の一つに、バルチック艦隊第二戦

艦隊四番船の装甲巡洋艦「アドミラル・ナヒモフ」がある。なんと、驚いたことに、このナヒモフ号の沈没後、同艦艦長等二名は水難救済会に救助されており、水難救済会五十年史及び同会百年史に「大海戦後の救助状況詳報」（明治三十八年六月九日下関救難所長報告）としてその記載があったのだ。少し長いが重要な部分であるので引用（百年史の記事は現代かな使いであり、かつ要約文となっている。）する。それによると、「明治三十八年五月二十七日午後五時飛脚をもって各支所へ海戦に付救助出船の準備を伝令し」、「大海戦に付当所は彦島村各支所（下関救難所田ノ首、福浦、西山及び竹ノ子島各支所）員を」五月二十八日午前五時に竹の子島に召集し、「海戦付近の漂流人及び漂流物拾得の為」同日午前八時から「現場近く救助に向かせ」午後七時まで現場付近を搜索したが、何の漂流物もなかったようである。そして翌日二十九日午前三時に「田ノ首、福浦、西山及び竹ノ

子島の四支所の救助員が」再び「竹ノ子島に集合し、食料その他を準備して沖ノ島付近を搜索中、午前九時沖合にボート一隻と一個の漂流物を認め、急行したところ付近通行中の山口県鶴江の漁船が、先に現場に到着して」「シャツ一枚のまま」の「露兵二名を救助した。救難所員は、これを受け取り、応急の手当てを施し、竹ノ子島支所長山崎弥助方へ連れ帰り、介抱を加えるとともに救難所に通報してきたので、救難所長は竹ノ子島に向い、これを受け取り、門司停泊場司令部へ引き渡した。この露兵は「アドミラル・ナヒモフ」号艦長海軍大佐ロジヲノフと同号乗組員海軍大尉ロヂヲウイスキーの二名であつて、ねんごろな救助に対し幾度となく謝辞を述べた。」とある。なお、救助活動は翌三十日も実施されている。召集をかけるにも電話ではなく「飛脚」であり、引用文にはないが「現場に漕ぎ付」とか「現場に漕ぎ出したる」の記述があることから、救助船はエンジンのない「手

漕ぎ船」であつたと思われる。しかも、搜索海域は沖合九海里にも及ぶことがあつたようで、これを手漕ぎで移動したのである。大変な救助活動である。現代とはまったく異なる環境での救助活動に、頭が下がる。

さらに驚いたことがある。実はこの話の前の部分、つまり、沈没直前から沈没直後にあたる記述があつたのだ。吉村昭著「海の史劇」である。同書から要約して引用する。

「仮想巡洋艦『佐渡丸』艦長釜尾忠道大佐は、「ナヒモフ」が戦意を完全に失っているのに気付き、略々航海長犬塚助次郎大尉に「敵艦を捕獲し、艦長以下を連行せよ。」と、命じた。略々犬塚大尉は、午前七時五十分「ナヒモフ」に接舷した。略々「早く短艇に乗りなさい」と犬塚が言うと、艦長は頭をふつた。そして、「私たちは、ロシア海軍軍人として祖国の軍艦と死を共にしたい」と、低い声で言った。略々犬塚は、

東郷の願

やむなく艦長と航海長の説得を断念し急いで短艇に戻ると同艦の舷側をはなれた」のであるが、略々「午前九時、ナヒモフは対馬琴崎の東方沖合で沈没。」し、「艦長と航海長も相擁して海中に没した。が、その直後かれらは日本漁船によって発見され、奇跡的にも救い上げられた」のである。この場面は、ここで終わっている。

この史実こそが、東郷の心の琴線にふれたのだ。東郷の琴線にふれた「何か」とは、このことだったのだ。きつとそうであるに違いない。日本海軍の攻撃により今まさに自艦が沈もうとする時、この誇り高い露国艦長ロジオノフと航海長は、露国海軍軍人として、日本軍艦の退艦勧告を拒否し、祖国の軍艦と死を共にしようとしたのである。露国の誇りと海軍軍人としての名誉を重んじ、死を選んだのである。まさに、露国海軍の誇りであったろう。彼らは、ナヒモフとともに沈んだ。しかし、結果として助かり、漂流し

ているところを発見された。敵国の将兵にもかかわらず彼らを奇跡的に発見し救い上げたのは、五十年史や百年史に出てくる、あの「山口県の鶴江の漁船」であり、その後は、水難救済会の救助員が海上で引取り、応急手当を施し、手厚く介抱したのである。東郷は、彼らと自分の姿を重ね合わせたに違いない。死闘の結果勝利の女神は自分に微笑んだ。しかし、わずかの天佑の差で自分が彼らの立場になり得たのである。この史実に、やはり誇り高い軍人である東郷の心は揺さぶられ、かつ、感謝したに違いない。救助員に対し、ほんとうにありがとう、と。

救助員が敵国の将兵に対し手厚く対応した背景には、当時の日本人であれば、何としてでも訓令を守らなければ、という思いはもろろあつたのであろう。しかし、それ以外にも、日本人の武士道、また、同じ海に生きる者に対する畏敬の念が息づいていたのではないだろうか。彼らの行為は人道主義の発露であり、これ

を義であり、愛であると言わずに、何が義と呼べるのか。

とにかく、「水難救済会百年史」と「海の史劇」の二つの記述は見事に話がつながっているのだ。それにしても、吉村氏の緻密な取材には驚かされた。では、この史実をいつ頃、誰が東郷に伝えたのであろうか。

※

この当事の水難救済会名誉総裁は、初代有栖川宮威仁親王殿下である。

実は、日本海海戦に関してある重要な報告が一本の糸となり、宮さまと東郷とがつながっているのである。その重要な報告とは。前出吉村昭著「海の史劇」にその記述がある。明治三十八年四月一日、殿下と妃殿下はドイツ商船「プリンツ・ハインリッヒ号」で、ドイツ皇太子の結婚式参列のためドイツに向け横浜を出港した。宮様には、海軍中佐大沢喜七郎が

随行したようであるが、「上海を経て四月十四日仏領インドシナ沿岸を航行中、午前十一時半左舷方向に三本のマスト、二本の煙突の軍艦を望見した。〔中略〕大沢はそれを、カムラン湾を根拠地として哨戒任務に当るロシア艦隊の艦艇であることを確認した。そして、さらに船がカムラン湾外に達した時、湾内に思いがけなくおびただしい大小多数の軍艦が碇泊し、さかんに煤煙をあげているのを目撃した。」のである。四月十六日宮様一行のもたらしたこの極めて重要な情報は、諜報員を介し直ちに海軍省あて打電され、すぐさま連合艦隊に伝えられたことは言うまでもない。実は、バルチック艦隊の動静に関して、日本側が確実につかんでいた情報は、四月七日マラッカ海峡通航時が最後であり、その後外国商船等を経由しての情報しかなかった。それが、今、宮様からの確実な情報があったのだ。東郷がこれをどれほど喜んだことか。その後、再び日本自身が掴んだ情報は、開戦

当日の五月二十七日〇四四五に発信された哨戒艦「信濃丸」からの、あの電報であった。「敵ノ艦隊、二〇三地点ニ見ユ」。このような状況であったからこそ、四月十四日の宮様情報は、バルチック艦隊の動静を予測するうえで、東郷にとつていかに貴重であったか想像に難くない。歴史にifはないと言われるが、もし、宮様のバルチック艦隊発見報告がなかったなら、東郷はどのように判断したであろうか。

※

こうして、両国の命運を懸けた日露戦争は、明治三十八年九月五日のポーツマス条約調印、同年十月十六日の日露講和条約公布を経て終結を迎えた。

とにかく、かろうじて戦勝国の荣誉に浴した我が国は、その歓喜を噛み締めるかのようには、十月二十三日に連合艦隊の勝利を祝う凱旋観艦式が横浜沖で催された。

その前日、十月二十二日、連合艦隊司令長官東郷平八郎大將は、幕僚を従え、日本海海戦の戦闘詳細を上奏のため、宮城へ参内した。明治天皇が、皇太子、他皇族を従えて出御され、東郷の上奏が終わった後、別室で酒肴をふるまわれ、次に海軍省に赴き祝宴に参加した（前出「海の史劇」）。残念ながら、当日の列席者の詳細は不明である。しかし、宮さまは、この祝宴に参加されていたはずだ。そうに違いない。

なぜそう言えるのか。奏上の際、明治天皇は皇太子や他皇族を従えて出御されたのである。皇族の一人である宮様もその中の中にいた可能性は高い。宮様は、皇族であるとともに東郷と同じ海軍軍人で、しかも大將でもある。少し時代は遡るが両者が少將時代には、東郷が明治二十八年二月に常備艦隊司令官に、宮様は明治二十九年十一月に同司令官に転補されており、二人の間で引継ぎがあったかもしれない。また、カムラン湾におけるバル

東郷の願い

チック艦隊の発見、動静報告により、東郷と一本の糸でつながったのだから、彼の今日の陛下への奏上には特別の思い入れがおありのほうである。こうして見てくると、東郷とは浅からぬ縁があり、日本海海戦では重要な役割を果たされた宮様が、東郷が連合艦隊司令長官として天皇陛下に奏上するこの日、御臨席されないのでは不自然である。むしろ、戦争の終わった今東郷としみじみと話をしたかったのではないのか。その席で、宮様のご活躍、日本海海戦についてなど、勝ち戦の話で盛り上がったことであろう。バルチック艦隊の情報に対して、東郷からあらためて丁寧な礼ものべられたに違いない。

そうであるとするれば、この時であろう。宮様が、水難救済会の日露戦争での活躍を東郷に語ったのは。勝ち戦の裏で、目立ちほしくないが、肅々とナヒモフ号の艦長と航海長等露国海軍将兵の人命救助活動に従事していたことを。また、訓令の

とおり、敵国将兵であろうと、死を賭して戦い傷ついた相手に対し、敬意を表しつつ誠実にねんごろに対応したことを。

そうした会話の流れの中で、海戦を勝利に導き、今や時の人となった東郷に、同会への揮毫を勧めたのではないか。救助員の士気高揚のために、また今後の活動の拠り所となるように。あるいは、こうした話を聞いた東郷から揮毫を申し出たかも知れない。海戦後も戦闘は樺太方面等でつづいており、連合艦隊司令長官としての東郷は忙しく、また、宮さまも私事都合により明治四十年からは神戸の別邸で余生を送られていることから推定すれば、この日が最も自然であり、この時をおいて他に扇の書を依頼する機会はなかつたものと考ええる。それから日を置かず、東郷は自宅の部屋にこもり宮様の話を思い浮かべ、こみ上げる気持ちを抑えながら扇に向って一気に書き上げたのだった。「義ハ八紘ニ普クシテ 愛ハ四海ニ續ク」と。

東郷の書は、今も水難救済会に生きているであろうか。きっと生き続けている。なぜなら、活動の根源が「義」と「愛」であったからこそ、先達の心を動かし、百年を超えて水難救済会が存続しているのだ。今を生きる我々は、その心を後世に伝えていかなければならない。

そう、それこそが、東郷が扇にこめた願いであるのだから。

※